

□ レコード (CD&DVD)

諸石幸生

CD界を振り返る ～ CD不況と言われる中で

CDが売れなくなったと言われて久しいが、音楽を求める聴き手は、かえって増えているのではないかと思える場面に出くわすことも多いこの頃である。確かに、CDショップは減少しているし、かつてのカラヤン、バーンスタインのような、クラシックを象徴するかのよう存在もいないから、話題性に欠けるかもしれないが、それでも熱心な聴き手は数多いし、そうした層が幾重にも分かれながら音楽との接点を求めて動いていると感じる場面も多い。

また昨年の本稿でも指摘したように、クラシックの老舗的な一大レーベルであったEMIが最終的にはワーナー傘下となり、現在、旧譜のリリースが旧ビッチで行われるなど、一見、活発な動きにも見えるが、新録音の見通しは不明であり、このままだと、フィリップスと似たようなケースになることも考えられよう。

さて、昨年のリリース状況を月刊誌「レコード芸術」2015年1月号付録の「レコード・イヤールック2015」を手掛かりにみてみよう。

	新譜	旧譜	トータル
交響曲	121 (147)	261 (194)	382 (341)
管弦楽曲	54 (63)	187 (153)	241 (216)
協奏曲	72 (68)	143 (153)	215 (213)
室内楽曲	80 (93)	99 (67)	129 (160)
器楽曲	244 (184)	184 (173)	428 (357)
オペラ	16 (4)	16 (4)	32 (8)
声楽曲	80 (56)	80 (27)	160 (83)
音楽史	26 (9)	16 (27)	42 (36)
現代曲	30 (7)	13 (73)	43 (80)
小計	723 (531)	999 (871)	1722 (1494)

といった結果である。なお、()内の数字は2013年度のものである。およそ1800点近くのリリースが行なわれたことが分かる。これは大変な数である。だが、この中で注目されるべきは、新譜の総数であろう。一昨年の531だったのに対し723と200点近くも数がふえている。これは一見すると歓迎されるべき数字ではある。だが、近年の傾向として、新譜の中には、クレンペラーやチェリビダッケといった往年の名演奏家のライヴあるいは放送録音などが新たにリリースされたものなどが含まれるし、器楽曲などは日本の演奏家が自分自身で自主制作したものなどが数多く含まれており、そのまま従来の基準で推し量るのは訳が違うといった辺りも考慮されるべきであろう。だが、それにしても、数的にはかなりの数がリリースされていることは疑いようがない。要は、それらがいかにか聴き手の需要と結びついているかだと思われる。こうした中で行われた2014年度のレコード・アカデミー賞だが、今年は第52回を数えた。大賞三賞の中の金賞は、フランスの名指揮者として人気上昇中フランソワ・ザヴィエ・ロトのストラヴィンスキー「春の祭典」[ペトルシユカ]に輝いた。レ・シエクルという時代楽器によるオーケストラによる演奏である。「春の祭典」はこのアカデミー賞に登場する機会は数多く、過去にラトル、ズヴェーテン、ゲルギエフ、ティルソン・トーマス、ドラティ、デイヴィス、メータ、ブーレーズ盤などが顕彰されているが、今回のように時代楽器による例は初めてである。なお、これはいわゆる古楽器による演奏ではなく、20世紀初頭の楽器によっており、いわばアール・ヌーヴォ様式のオーケストラ演奏を迫及したも

のと言えなくもないように思われる。

大賞・銀賞はアルゲリッチ、アバドによるモーツァルトのピアノ協奏曲集(第25、20番)、銅賞はチェロのジャ・ギアン・ケラスとメルニコフに拠るベートーヴェンの「チェロとピアノのための作品全集」である。アルゲリッチとアバドは1960年代から録音を繰り返してきているが、これは久々の録音であるし、待望のモーツァルトの協奏曲という点からも注目されるものである。さらにケラスは今やチェロ界の第一人者といった人気と存在感を誇っており、彼がチェリストとして参加しているアルカント・カルテットの録音が過去にアカデミー賞に輝いたことがあるが、今回はベートーヴェンのチエロ・ソナタを中心とする演奏が受賞となった。ピアノのメルニコフも近年評価が高く、銅賞の受賞は当然といった雰囲気であった。

この他、交響曲部門では、昨年なくなったブリュッヘンによるモーツァルトの後期3大交響曲集が、器楽曲ではアンジェラ・ヒューイットのバッハの「フーガの技法」、オペラ部門では、バルトリの「サントペテルブルク、女帝へ捧げられたアリア」、声楽部門はヘレヴッヘン指揮によるハイドンのオラトリオ「四季」、音楽史部門では、江崎浩司のテレマンの「12のメトディシェ・ゾナーテン」、現代曲では飯野明日香による「フランス・ナウ」という結果となった。

なお、特別賞・企画の製作部門の賞として鈴木雅明率いるバハ・コレギウム・ジャパンによるバッハの教会カンタータ全集が贈られた。これは1995年から2013年という長期間にわたる録音が完成されたことを記念したものとしての受賞であった。さらに、特別部門の特別賞としてマリア・カラスの「リマスター・スタジオ録音全集」が受賞した。今なお絶大な人気を誇るカラスではあるが、これまでリマスターされる機会に乏しく、これは正に待望のものであった。

さて、最近の話題としては、ハイレゾ音源への期待感がある。これは、CDをはるかに超える能力を持つ再生テクノロジーのことであり、「ハイレゾ音源」とは、よりマスターが持っている情報量に近い高解像度の音源(データ)のことをさす。情報量の多いハイレゾ音源ではきめ細やかな音になり、CDでは再生できない空気感と臨場感を表現することができるものである。即ち、マスターが持つ音質を家庭で聴けることになる訳だが、具体的には24bit、96KHZでCDの3.26倍、24bit、192KHZではCDの6.52倍という、精密さと空間性を堪能させてくれるものである。もちろん既に実用化されているが、まだまだタイトル数は少なく、本格化されているとは言いがたい。ただし、CDに付加価値をつけるというのか新しい価値と魅力をもつソフトとして売りだされた例を紹介しておきたい。

まずは、カメラータからリリースされた「モーツァルト/フルート四重奏曲集」である。これは、ブルーレイ・ディスクであり、CDプレーヤーでは再生できないが、24bit、96KHZか24bit、192KHzの選択が可能であり、従来のCD体験とは次元を異にするサウンドで、聴き手にモーツァルトの新しい世界を旅させるかのようである。(CMBD80008)もう一点は、ゲルギエフ率いるロンドン交響楽団のペルリオーズの「幻想交響曲」である。これは一つのパッケージにSACD、即ち従来の、CD2チャンネルとSACD(ステレオとサラウンド)をいれるとともに、もう一枚、ブルーレイをいれており、オーディオ用として、24bit、192KHzのサラウンドと2チャンネルを、さらに映像として24bit、48kHzもふくませるという用意周到ぶりである。ただし、映像部は別テイク(CD用の音源とは微妙に異なる)のものであり、その判断が難しいが、やはりブルーレイの2チャンネルで体感するペルリオーズの世界は確かに奥行き感と拡がり感が異なり、大きな演奏会場で聴くオーケストラ・サウンドを満喫させるかのようである。

さらにCDの売り方が急変しているようにも思われる。それはアーティスト別、あるいはレーベル別に、過去の演奏のすべてをボックス化してリリースしてしまうというものである。価格にも安く、便利は便利だが、レコード会社自らが、自身の首を絞めるようなことにならないのかと心配もしてしまう。